

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01632

研究課題名(和文) 学校から職業への移行と人間形成に関するバイオグラフィー的研究

研究課題名(英文) A Biographical Approach to Self-Formation during Transition from Higher Education to Working Life

研究代表者

鳥光 美緒子 (Torimitsu, Miko)

中央大学・人文科学研究所・客員研究員

研究者番号：10155608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,820,000円

研究成果の概要(和文)：大学卒業後10年前後の有職者22名に、職業人生をテーマとするオープンエンドのインタビューを実施した。収集された事例の中から、職業への移行もしくは企業内異動によって引き起こされた危機的経験を経て、転職ないし更なる社内移動に至った4事例を抽出し、その語りをバイオグラフィー過程として再構成した上で、それを人間形成の観点から検討した。結果「人間形成論的に方向付けられたバイオグラフィー研究」の意味で人間形成を遂げた事例は現段階では確認されていないが、職場環境が人間形成にとって有効な資源であり、職務遂行に必要な知識やスキルのみならず人間形成への影響を含めた視点から、それを検討することの重要性が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として次の2点が指摘される。第1に人間形成論的に方向付けられたバイオグラフィー研究の推進に必須のデータ解読の方法について、「伝記学習Biographical Learning」研究の方法論が有効な参照項になりうることを示したこと、また第2にこれまでわが国の生涯学習、教育社会学、教育哲学などの諸領域において、ナラティブ・ラーニング(Goodson, I.)やエイジェンシー概念(Biesta, G.)など、断片的にその成果が知られるにとどまっていた「伝記学習Biographical Learning」の研究プログラムに着眼しその活用を試みたこと。

研究成果の概要(英文)：Open-ended interviews on the topic of professional life were conducted with 22 employed individuals who had been out of college for around 10 years. From the collected cases, four cases were selected in which crisis experiences caused by the transition to a new profession or a transfer within a company led to a job change or a further internal move. Although no case has been confirmed at this stage, to have undergone a transformative process in the sense of "die bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung", the study did reveal that the work environment is an effective resource for self-formation(Bildung), and that it is important to examine it from the perspective of not only the knowledge and skills necessary for job performance, but also its impact on self-formation.

研究分野：教育哲学

キーワード：人間形成論的に方向付けられたバイオグラフィー研究 人間形成(Bildung) 伝記学習 生涯学習 学校から職業への移行 ライフコース

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年代後半以降、これまでもっぱら理論的対峙に基づいて解明されてきた「人間形成」概念を、経験的研究に基づいて解明しようとする試みがドイツの一般教育学において行われてきた。その代表的な研究プログラムが、人間形成論的に方向づけられたバイオグラフィー研究(die bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung, 以下 boB と略記)である。そこにおいては経験的研究との接続を念頭に人間形成が変容としての人間形成過程として捉えられるとともに、その過程はナラティブ・インタビューによって収集された「語り」に基づいて再構成することが企図される。研究代表者らは本研究に先立って、学校教育の及ぼす人間形成に関する影響を中心に、boBに基づく事例解読の試みを行ってきた(課題番号:16K04489)。本研究はその研究の延長上で企画されたものであり、その際、boBの手法を学校から職業への移行という社会的課題に活用すること念頭においた。

2. 研究の目的

「後期近代」におけるライフコースに対する問題意識のもと、移行問題、とりわけ若者の学校から職業への移行に問題についての研究関心が国内外において高まり知見が蓄積されつつある。わが国では、社会学において、非正規雇用など経済的社会的に不利な状況にある若者の移行の実態と必要な支援に関する研究が進展する一方、心理学においては、主に大卒者を対象にジェームズ・コテらの理論を参照に、企業社会の変転する要請を生き延びるアイデンティティ形成の諸要因の検出と検証に方向づけられた研究が関心を集めている。本研究は後者、心理学において行われている研究と基本的な関心を共有するが、上記の研究が量的研究を志向するのに対して、質的研究方法を採用し、ナラティブ・インタビューに基づいた事例の語りを、葛藤や挫折経験を契機とする主体の変容過程として再構成する。それを通して今日の変化した職場環境が人間形成においてどのような意味を持つのか主体の側の視点を通して明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

1) インタビュー調査の概要

調査の対象としたのは、卒業後10年前後の大卒者である。調査は、2019年8月から2023年2月にかけて行われた。調査協力者は22名(男性15名、女性12名)、インタビュー時間は、平均して2時間弱であった。

調査協力者は大きく2つのグループに分けられる。第一のグループでは、首都圏の大規模私立大学のある専攻の2006年度から2008年度入学者153名にハガキで調査協力を依頼し、協力を申し出た17名にインタビューを実施した。インタビュー時点での調査協力者の職業は教員6名、公務員3名、会社員3名、大学職員2名、自営業1名、研究職1名、フリーランス1名であり、このうち転職経験者が4名いた。一方、もう一つのグループは、個人的なつてをたどって調査協力を依頼したものである。結果的にその全員が国立大学卒業生で、C大学出身の3名を含む。インタビュー時点での職業は会社員3名、NPO法人1名、フリーランスが1名である。5名中2名が転職を経験していた。

インタビューの実施に際しては、最初に、「あなたの職業人生について教えてください」という質問を提示、その後は何をどのようにどこまで話すかについては基本、語り手に委ねた。収集されたデータは全て文字起こし、その後事例分析の段階で、トランスクリプト記号を用いたトランスクリプトに作成しなされた。データ分析に際しては内容分析に基づく手法を選択した。

2) 解読の手順

boB にもとづいていえば、再構成される人間形成過程は、次のように進展する。すなわち、語り手の確立された「世界関係と自己関係」では対処できない新しい事態に語り手が直面し、別の新しい構図の世界・自己関係が生起してくるというように、である。だがこの変容として人間形成過程については、それが経験的研究において完結した形で見出されることが稀であることも指摘されている(Koller 2012)。それを踏まえ本研究では、人間形成過程そのものの再構成を直接に目ざす代わりに、人間形成過程とピオグラフィー過程とをひとまず区別してピオグラフィー過程を再構成、そのうえでさらにそれを人間形成という観点から検討することとした。

詳細な分析を加える事例として、収集した 22 事例から 4 つを選択した。選択したのはいずれも、職業への移行において危機的な状況を経験しその後なんらかの着地点に達しているケースである。彼(女)らのピオグラフィー過程を再構成するにあたっては、boB と同時期に、ヨーロッパの成人教育研究領域で開発され普及している「伝記学習(biographical learning)」研究を参照し、それにもとづいてインタビュー・データは、語り手の問題解決に沿ってピオグラフィー過程として再構成された(Biesta et. al. 2011)。

4. 研究成果

1) 事例概要

タカヒロさんの事例

水道局員になるまで 企業就職は想定せず、家庭裁判所調査官、法務教官、市役所職員の 3 択で就活に臨んだ。縁があったのが市役所である。水道局勤務が決まり、当初、児童・家庭関係を念頭においていたため、多少戸惑うが、水道は「命を守るもの」と聞き、局員であることを積極的に受け入れる。

勤務のキャリア 最初の仕事は事業所の料金徴収係だった。そこで 4 年、その後広報課に 1 年、その後また料金徴収係に戻って 4 年、現在は人材研修を担当している。一方彼はアクティブな労働組合員でもあり、地域と全国の双方のレベルで役職を経験する。

広報課の仕事 2 番目の広報課が「一番しんどかった」という。この課の仕事は公民連携で水道水を宣伝することであり、官民が実際に仕事で袂を接する、水道局の中でも特殊な部署である。体重が一気に 20 キロ増え髪の毛の 4 分の 1 が抜けた。業務内容の大幅変更と勤務時間無視のブラックな勤務体制のもと、慣れない仕事に追い立てられる。これまでのように「決まった仕事」だけをやっていたらいいのではなく、「決まっていな仕事...はい、やります、やらせてください」と言ってやるのが求められた。こんな仕事が本当に「水道局のためになる」のかわからず、「仕事の存在意義」を見失いかけていた。加えて、慣れたと思った頃に母が倒れ、看病と仕事の両方が重なり、自分でも「病的な感じ」になる。一方省みると、以前に働いていた事業所では、決まった仕事だけをやっているだけの「おっさんたち」がいる。その人たちが、酷使されている自分より多い給料をえていることに、憎悪に近い気持ちを覚える。電車を前に、ここで飛び降りたら楽になるかとの考えが、一瞬頭をよぎる。見かねた係長の配慮で、異例ではあるが 1 年でまた事業所の料金徴収係に、配置転換になる。だが、驚くべきことに、タカヒロさんはこの過酷な経験を振り返って、もう、2、3 年そこにいたかったと思うと述べる。あそこでそのまま鍛えられていたら、今頃自分は水道局の現状をどう見ていただろうかと考えるという。

変容 この間彼は、市役所の公式見解に基づく、手続き重視の仕事観に対しては批判的になる。目的に沿って何が必要かを自分で考えることが重要であると強調する。それ以上に注目されるのは、このような仕事観の変化と連動して、彼の他者関係もまた変化したことである。「目上

の人」は無条件にこれを尊敬するという、伝統的ともいえる彼の倫理は、この間の経験で変容する。仕事の仕方次第では、目上の人であっても尊敬できないと考えるようになる。

ユウジさんの事例

就職から転職まで これまでの高校受験、大学受験を切り抜けてきた経験を語って、ユウジさんは、ギリギリまでやらないが、最後全力で努力することで一定水準以上の着地点に辿り着いてきたと、述べている。だが、就職にはそのやり方は通用しなかった。リーマンショック後の「就職率がどん底」の時期であり、結局、受かった会社に決めざるをえなかった。大手メーカーの物流部門子会社に就職、地方支部に3年、東京本社に移って4年、さらに別の地方支部に1年、一貫して経理畑を歩む。転職にいたる最初の契機は、東京本社での経験である。仕事内容そのものは充実していた。だが、明らかに「仕事の振り方」がおかしい。身近な先輩が2人倒れて休職、彼自身も過呼吸で病院に行くが、休まず踏みとどまった。「やるかやられるか」という過酷な状況で、自分の身を守るのに必死だった経験を指して、彼は、それが同社における仕事経験のなかで最も重要な出来事であったと振り返る。これを契機に転職を考えるようになる。その後、地方支部に移るが、その組織の「びっくりするほどの甘え体質」に嫌悪感を覚える。長年、悩んでモヤモヤした気持ちが吹っ切れる切れるきっかけとなったのは、上司が社員を称した「兵隊」の一言だった。翌日、人材会社に転職依頼を申し込んだという。

転職してみて 仕事自体は「めっちゃくちゃしんどい」。だが、「自分がなんとかすれば、できることをすること」は苦ではないという。転職前の会社では、会社で生き残るのに必要な仕事をしてきたが、それが普遍的に役に立つかどうかは疑問だった。今の会社では、「社会正義のために働いている」という実感を持つことができる。

自己関係の変容 ユウジさんに対しては転職直前とその2年後との2回、インタビューを行ったが、注目されるのは、受験、学校、仕事など、彼が重要と考える場における自己関係について、1回目では、瞬発的に最大限の努力をしさえすれば日常的には最小限の努力をもってよしとする、若干、自分に対して甘いとも言える自己関係を吐露しているのに対して、2回目ではそれとは対照的に、「自分にとって良い生き方をしたい」というストレートな倫理的見解を示していることである。これまでにない新しい行為様式の出現と思われるが、残念ながらこの変化が、どのような出来事や経験を契機とするものであるかは、語りからは確認できない。

ヒロコさんの事例

仕事の履歴 大学卒業後、就活など制度化された移行ルートを拒否し、フリーランスの道を選ぶ。最初の職は私立S高校の常勤講師だった。彼女は中学時代に学校の厳しい管理体制を経験しており、だからこそ逆に生徒たちの味方になりたいと考えての講師の選択であったと推測するが、現実には「ブラック」な勤務体制に加え、自分の中学時代が「フラッシュバック」し、強い「鬱」状態に陥り一年で退職する。3ヶ月のヨーロッパ旅行をへて、思いつきで始めた婚礼カメラマンと高校非常勤講師の二重生活を6年続けた後、仕事をすべていったん整理してフィンランドホーンに留学するが、父の病の知らせで帰国し、現在はフリーランスのカメラマンをしている。

現実と願望の間の語り 仕事内容には広告写真と、年代の違う仲間のチームで行う教科書撮影の2種類があり、後者の仕事に経済的にも精神的にも助けられている。一方、広告写真の仕事では、写真の出来次第で、いつ仕事を切られるかわからず、常に評価されている感覚がつかまとう。「怖い」と彼女は率直に述べる。そのため、メールが来ればすぐ返信し、納品にも気を配る。この現実を一方に、他方において語りにおいて彼女が実現しようとしているのは、プロとしての責任感を感じるが、他人の評価を気にすることなく、作家性の刻印を持つ作品を通して、誰

かが自己肯定感をもつための「光の一つ」であることを願って生きる、いわば願望としての彼女自身の姿が、語りの着地点になるような、自由の上昇史として人生の物語である。彼女の語りには、このあたりで価値観がバーンと変わってきて、といった表現が、何度となく現れる。その契機として示されるのはラダックでの神秘体験であり、ハワイのコミュンでの出会いであり、父との和解に関連する出来事であったりする。だがそれら、個々の契機が統合されて、自由の上昇の物語へと帰結するにはいたっていない。彼女の願望を規定しているのは、他者の評価圧力とは無縁に生きる無垢で自律した大人という、彼女固有の「世界・自己関係」であるが、それはもはや機能しなくなっているように思われる。

ユキナさんの事例

上昇史としての語り ヒロコさんの語りが挫折した上昇の物語としての人生の語りには、ユキナさんは成功している。彼女の語る発達史には大きく、二つの契機がある。一つは「井の中の蛙」で終わりたくないという意識の覚醒である。地元から出たいと強く願う彼女は C 大学に進学、卒業後は大手社会インフラ系企業に就職する。そこで経験を積むうちに彼女の中に、日本型安定企業の集団主義に対する強い違和感が生まれてくる。最初の覚醒を後押ししたのが、模試成績県内トップの成績であったとしたら、第二の転機である成果主義の働き方へと彼女を後押ししたのは、社内研修に招聘された社外講師による高い評価であった。「パワハラ」の上司との葛藤下の仕事をまっとうして自信を深めた彼女は、人事面談で自分の希望を表明するという「賭け」に出るが認められず、前々から話を進めていたコンサルティング会社に転職、その後さらに「攻め」の案件を扱える別の外資系コンサルティング会社に転職する。社の方針でもある「私の happy を確立する働き方」「家族の happy を確立する生き方」が次なる彼女のビジョンである。

2) 考察

タカヒロさんの他者関係、ユウジさんの自己関係には変容の兆候が認められたが、それを boB にいう変容過程として分析することは今後の課題として残された。ヒロコさんの事例では世界・自己関係が機能していないことが確認されており、それが新しい構図の生起につながる潜在的可能性はある。ユキナさんについては、上掲の説明では触れなかったが、彼女の世界・自己関係の解明には、「井の中の蛙で終わりたくない」という彼女の意識覚醒の成立のコンテクストを、家族、特に母親との関係を視野に入れて分析することが不可欠であると思われ、今後、分析を続行する予定である。

このように、いずれの事例でも「変容としての人間形成」の分析は途上であるが、仕事経験が多様な省察を喚起する契機であり、また仕事が社会的承認をえる重要な契機であることは、すべての事例に共通している。職場環境について、コンプライアンス重視の要請にとどまらず、人間形成という観点からそれを検討することが重要であると思われる。

boB には固有のデータ解読の方法がないことが、その活用の普及を妨げる要因の一つであるが、これに関して「伝記学習」の方法論を、boB と伝記学習との、両者のプログラムと基礎理論の違いを考慮した上で活用することが有効な脱出口の一つを示していると思われる。とりわけ、危機的な移行を語り手の問題解決過程に沿って再構成することが、単純だが有効な解読の方法であることが、今回、タカヒロさんとユウジさんの事例で確認された。

引用文献

- Biesta, G., Field, J., Hodkinson, Ph., Macleod, F. & Goodson, I. (ed.) (2011), *Improving Learning through the Lifecourse*. Routledge.
- Koller, H.-Ch.(2012), *Bildung anders denken*. Kohlhammer.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野平慎二	4. 巻 70
2. 論文標題 経験的な語りと人間形成論をつなぐ - ビオグラフィ・インタビューの 意味形象の再構成を通じた反省的 - 規範的人間形成論の探究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告 教育科学編	6. 最初と最後の頁 59, 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野平慎二	4. 巻 31
2. 論文標題 言語と人間形成 - 人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究の 視角から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ディルタイ研究	6. 最初と最後の頁 21, 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥光美緒子	4. 巻 312
2. 論文標題 巻頭言 卒業生に聞く「あなたにとって仕事とは。」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央評論	6. 最初と最後の頁 12, 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥光美緒子	4. 巻 312
2. 論文標題 第一部 中大卒業生の証言 - あなたにとって仕事とは。	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央評論	6. 最初と最後の頁 17, 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥光美緒子	4. 巻 312
2. 論文標題 第二部 仕事と経験のさまざま－研究者の視点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央評論	6. 最初と最後の頁 97,97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥光美緒子、野平慎二、藤井佳世、溝上慎一、山田浩之	4. 巻 127
2. 論文標題 人間形成・自己形成・アイデンティティ形成－人間形成論的ピオグラフィ－研究の来し方行く未を見据えて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 111,118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野平慎二、藤井佳世、伊藤敦広、平田仁胤、鳥光美緒子	4. 巻 123
2. 論文標題 人間形成概念の再検討－理論と経験をつなぐには－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 107.113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野平慎二、伊藤敦広、平田仁胤
2. 発表標題 人間形成概念の再検討－理論と経験をつなぐには－
3. 学会等名 教育哲学会・ラウンドテーブル
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野平慎二
2. 発表標題 言語と人間形成－人間形成論的に方向づけられたピオグラフィ研究の視角から
3. 学会等名 日本デルタイ協会2019年度全国大会 研究討議における報告（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 鳥光美緒子、野平慎二、藤井佳世、溝上慎一、山田浩之
2. 発表標題 人間形成・自己形成・アイデンティティ形成－人間形成論的ピオグラフィ研究の来し方行く未を見据えて
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	野平 慎二 (Nobira Shinji) (50243530)	愛知教育大学・教育学部・教授 (13902)	
研究 分担者	藤井 佳世 (Fujii Kayo) (50454153)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------